

M+ 1p regular
Size: 10pt
Leading: 24pt
Kerning: Optical

ヨークシャーのグールに生まれたブライアーズは、シェフィールド大学で哲学を学んだのちに、3年間音楽を学んだ。彼の最初の音楽的な業績としてあげられるのは、ジャズ・ベーシストとして参加し、デレク・ベイリー、トニー・オクスレイと共演したジョセフ・ホルブルックである。19世紀のイギリスの作曲家の名前をバンド名にしたこのトリオは、当初は比較的に伝統的なジャズのレパートリーを演奏していたが（1965年の作品ではジョン・コルトレーンを演奏している）、やがてフリー・インプロヴィゼーションへの演奏へ移行していく。しかし、若いベーシストが格式ばった方法でジャズを演奏しているのを見て、不自然さを感じたブライアーズは、ジャズ・ベースの演奏に不満を抱くようになり、作曲へ興味を移していった。彼の作曲家としての初期の作品は、ジョン・ケージ（イリノイ大学滞在時に、短期間であるがブライアーズとケージはともに作曲を学んでいる）、モートン・フェルドマン、アール・ブラウン、ミニマル・ミュージックなどのニューヨーク周辺の音楽の影響を強く受けている。1969年に、ポーツマス美術学生のために書いた作品『タイタニック号の沈没』（The Sinking of the Titanic）により、ブライアーズの名は世に知れ渡ることとなる。彼はこの作品において、1912年に北大西洋の海に沈んだタイタニック号の甲板上で、最後まで演奏を続けていた楽団員たちの演奏を生き残った乗客や船員たちの証言を元に再現しようと試みる。宮沢賢治の小説を元にしたアニメ映画『銀河鉄道の夜』（1985年）では、人々を安らかな死へと送り出す賛美歌『オータム』、『主よ、みもとに』として描かれた。ブライアーズは、諸説ある証言の中から、船とともに氷の海へ沈んで行った楽団員たちが間際まで演奏した曲として賛美歌『オータム』を選択。1975年のレコーディング（ブライアン・イーノのオブスキュア・レコードよりリリース）の際に、実際の楽団と同じ6弦構成で25分間『オータム』を繰り返し演奏した。『タイタニック号の沈没』はブライアーズにとってライフワーク（"Work in Progress"、常に進行中の作品）となり、新たな証言や資料をもとにこれまでに3回録音され、楽曲の構成や演奏者の形態も異なっている。最新の録音は1995年に行われたもので、密閉されたスタジオとは異なる反響空間を作るために、貯水塔やプールでの演奏を行っている。沈み行く船を表現する多数の効果音が散りばめられ、新たにもう1曲の賛美歌と子供の合唱なども加わった1995年版（61分）は、過去2回の録音と比べ、さらに重層な音響空間が構築されている。なお、1995年版に